

17 まちの情景と建築 世界編 田中修一

〔庭園〕 大きいことはいいことだ 王宮の幾何学式庭園（イタリア→フランス→オーストリア→ドイツへ伝播）



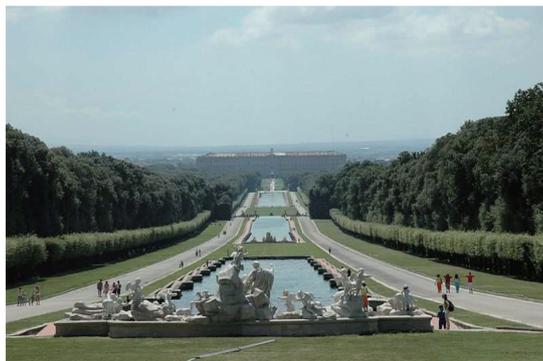
発想は 14 世紀イタリアの貴族の館から始まる。斜面を利用したテラスが特徴で、立体的に組まれている。16 世紀ごろが最盛期で、フランスから遠征してきたシャルル 8 世は、イタリア芸術とともにこれらの庭園にほれ込み、フランス式庭園（平面幾何学式）の先駆を成した。のちにヴェルサイユ宮殿として花開く。←

太陽王としてフランス絶対王朝を築いたのはご存じルイ 14 世。その大蔵大臣ニコラ・フーケは、自分の館ヴォー・ル・ヴィコント城の完成披露に王を招待する。王はその豪華さと広大さに圧倒されるが、この財源はどこから来たのか。不正を働いたに違いないと判断し、罪人として牢に幽閉する。しかし城と庭園の見事さを目の当たりにしてそれを上

回る作品を造ろうと、先代ルイ 13 世が 1624 に造ったヴェルサイユの狩猟小屋を大々的に改修する。担当はヴィコント城を手掛けた、建築家ルイ・ル・ヴォー、装飾家シャルル・ルブラン、造園家アンドレ・ル・ノートルをそっくり採用する。しかし何せパリから 22km も離れた辺鄙で水の出ない高台だ。建設には苦勞する。10 km 離れたセヌ川からポンプでくみ上げて大規模な貯水槽を設え、水圧で噴水を造った。バロック建築の代表作で完成は 1670 年。

→里帰りの形で、ヴェルサイユを意識したのがナポリ郊外カゼルタの宮殿だ。ナポリ王国カルロス 7 世は宮殿の設計図を見て大いに期待し、完成を待ちわびたが間に合わず、息子の両シチリア王国（ナポリ+シチリア）フェルディナンド 1 世（在位 1816 ~ 1825）のときにやっと出来上がった。彼は面白い王で、ハプスブルク家マリア・テレジアの娘マリア・カロリーナ（マリー・アントワネットの姉）を妻に迎えるが、色白で上品な彼女に一目ぼれした。特に手の美しさに惚れたらしい。自分は狩りと運動が大好きで、政治は妻を執政にして任せ遊び呆けていた。またスパゲッティ（細打ちパスタ）が大好きで手づかみ（当時はそれが普通だったらしいが）で食する。育ちのよい王妃から「なんと下品な」と響感を買ったのがきっかけでフォークが考案されたのだとか（これがフランス王宮に輸入されて宮廷マナーができた。高級フランス料理はこの辺が始まり）。

この王の実家はスペインブルボン家だ。ところで、イベリア半島はスペインとポルトガルだが、イスラムを半島から追い出す「レコンキスタ」の助力をしたのがフランスの貴族アンリ・ド・ブルゴーニュ（エンリケ・デ・ボルゴニャ）だ。彼は AD800 年以來イスラムに押され、辛うじて北部のみを支配地にしていたカスティール・イ・レオン王国のアルフォンソ 6 世の要請にこたえ、1093 年に援軍の兵を出して大活躍する。その褒賞にポルトゥカレ伯の名と妃と領地を賜り、その息子アフォンソ 1 世が 1139 年にポルトガル王国を建国した。だからスペインとポルトガルは親子のような国なのだ。この 2 国が大航海時代、地球を二分して支配する。しかし 1588 年スペインの無敵艦



隊がイギリスに敗れ（アルマダの海戦）、海上支配権はイギリス、オランダに移っていく。多くの植民地を持っていたにも拘わらず、フランス革命でナポレオンの侵攻、その後の内戦の勃発、第 1 次世界大戦後の経済恐慌、植民地の独立などによってポルトガルも同様に衰退する。

←ポルトガル中部に「ブサコ国立公園」がある。ここには最後の国王マヌエル 2 世（在位 1908 ~ 1910）が造らせた離宮があり、現在は国営ホテルとして人気を博している。深い森に囲まれた丘の中にあるのだが、朝霧にけふる佇まいは、おとぎの国に迷い込んだような錯覚に陥る、楽しい庭園である。